

「都市空間のデザイン・チャンピオンとは？」の編集にあたって

What is Design Champion for Urban Spaces?

高松 誠治・松本忠（担当編集委員）

This paper outlines the intention of this issue, which features Design Champions, with describing the current situation regarding the urban design qualities in Japan. The problems include lack of awareness of the value of good design, vertically divided administrative organisations, and imbalance between Tokyo and rural cities in terms of human resources. As a precedent in tackling those issues, this introduces briefly about CABE (The Commission for Architecture and Built Environment, U.K.). It then discusses about design championing for Japan's future (Part 1) and the need for local design champions (Part 2) with introducing each of the authors in this issue.

■デザイン・チャンピオン？

「デザイン・チャンピオン」とは、何者だろうか？それはあるいは、近寄りがたい「デザインの権威」か、はたまた、競争を勝ち抜いた「業界の覇者」か？もちろん、この特集が扱うのは、そういった類の話ではない。

日本語の「チャンピオン」という言葉は、もっぱら王座とか優勝者という意味で使われるが、もともとの英語の *champion* には、それ以外に「擁護者、推進者」という意味もある。しばしば、「She champions human rights. (彼女は人権を擁護する)」というふうに動詞としても使われ、主義や考えなどのために戦う、という意味となる。つまり、デザイン・チャンピオンとは、良いデザインを擁護し、推し進めるために戦う人々のことである。

では、なぜ今、デザイン・チャンピオンの特集を「都市計画」で取り上げるのか？それは、以下に述べるとおり、我が国では「都市空間の質を高めること」の大切さが、人々に十分認識されていないのではないかという危機感からである。都市空間の質の向上への気運を高めるためには、人々の意識を変えるようなムーブメントが必要なのではないか。そのためには、優れた都市空間のデザインを擁護し、推し進めるために戦う人々、すなわち

都市空間のデザイン・チャンピオンが必要ではないかと考えるのである。

■都市空間の質と、人々の暮らし

日本の都市空間を俯瞰してみると、現在の状況は決して満足できるものではない。しかし、この状況を好転させるには、専門家、関係者のみの議論だけでは、もはやどうにもならないのではないかとと思われる。都市空間の質を高めようという専門家らの努力は、そもそもユーザーである不特定多数の「市民」のために払われるものである。しかし、「市民」が毎日の暮らしの中でその必要性を感じていないとすれば、その努力は非常に虚しいものであり、また、決して満足いく成果を挙げることはできないだろう。

例えば、本誌読者の中で、郊外に大型商業施設が点在し、中心市街地に閑散としたシャッター通りが連続するような都市空間を「良し」とする人は少ないと思われるが、一方で、どれほどの「市民」がそれを問題と感じているだろうか。私たちは郊外大型店に代わる魅力的な生活の場の姿、オルタナティブを提示し、うまく伝え広めることができていないのではないだろうか。今求められているのは、優れた都市空間のデザインが人々の暮らしの質を高めることにつながることを、分かりやすく示していくことではないだろうか。

■総体的な取り組みの難しさ

美しい国づくり政策大綱の発表から、景観法の制定・施行へと繋がる動きは、「デザイン」が都市政策の重要な要素の一つとして認知されたという点で大きな意味を持つものであるが、それが果たしてどの程度、一般市民に認識されているかは疑わしい。いや、それ以前に、建築や土木など関係する分野の専門家の中にも、それらを認識できていない人も多いのではないか。

これはつまり、都市空間の計画や設計において「デザイン」が、細分化された専門分野の一つであり、付加的、装飾的な一要素であると誤解されていることを意味するのだろう。本来は、都市の経済活動にまで影響を及ぼしうる、総体的な概念のはずである。

例えば、日本で最も有名なデザイン賞である「グッドデザイン賞」の目的は、単に「美しさ」を競うことではなく、「生活の向上と、産業の高度化」であるとされている。都市のデザインについてもこれは当てはまる。良くデザインされた街は、単に見かけが美しいだけでなく、市民が豊かな毎日を過ごし、経済的にも繁栄するチャンスを多く持っているだろう。

ここで、デザインを、総体的なものとして捉えようとするときに障壁となるのが、縦割りの社会や組織である。都市空間は、自治体、民間企業、個人など多種多様な「作り手」により形づくられる。ところが、ユーザーである「市民」の認知や行動は、「作り手」側の事情とは全く関係なく、出来上がった空間に対して素直に作用するものである。作り手の事情を優先すればどうなるかは自明であり、それは繋がりや脈絡のない都市空間として表れる。

これを考えると、デザインを、都市空間全体を見渡せる、より上位の決定権者の横に据えて、戦略的に推進する必要があるのではないかと思われる。

■地方都市が抱える問題

また、日本の都市空間の質的向上を考えると、さらに難しいのは地方都市の問題である。

もちろん、意識の高い市民の努力により、魅力を発揮し続ける街も存在する。しかし、大多数の地方都市では、都市空間の質の低下に対する市民の危機感は小さく、その再生を担う人材も不足している。特に難しいのは、その地域の固有性を見出し、地域に根ざした活動ができる人材が必要だという点である。東京から単に専門家を派遣するのでは、東京の「お仕着せ」として、拒絶されることも多いだろうし、その地域にふさわしい都市空間デザインは実現しないのではないかと思われる。

このように、国全体の都市空間の質を高めるためには、各都市の市民が、高い意識を持って主体的に取り組む必要がある。そのためには、全国的なキャンペーンと、各地域における実践、両面から戦略的に推進する必要があるだろう。

■英国 CABE によるデザイン・チャンピオンの推進

このような状況の中で、私たちにとって参考となりそうな取り組みを行っている組織が英国にある。国の行政機関、建築都市環境委員会（CABE: The Commission for Architecture and Built Environment）がそれである。「良いデザインは人々の暮らしの質を高め、人生を豊かにする」という理念のもとに、デザインレビューやキャンペーンなど、多軸的な活動を行っている。どうすれば状況を変えることができるかを考え、ターゲットを絞って戦略的に活動しているように見える。そのためか、出版物のビジュアルや言葉選びにも、注意が払われているようである。

実は、「デザイン・チャンピオン」の推進は、CABEが行っているキャンペーンの一つであり、本特集企画のきっかけを与えたものでもある。このキャンペーンでは、自治体の幹部職員や議会議員、民間企業等の組織内部に、デザイン・チャンピオンを任命することを奨めている。

CABEの活動は我が国でも注目が高まっており、今年2月には、国土交通省が設置した「良好な景観形成のための建築のあり方検討委員会」において、CABEの常勤職員のトップであるリチャード・シモンズ氏が招聘され、CABEについて活発な意見交換が行われた。この6月に発表された提言「建築と地域社会」には、この時の意見交換の成果が反映されている。なお、シモンズ氏には、本特集に際して特別寄稿をいただいた。本特集の最後にその日本語訳を掲載する。

■本特集の構成

本特集は、以上のような背景を踏まえ、「都市空間の質を高めること」の大切さをどのように世に広めていけばよいのか、様々な立場の方に語っていただくものである。ここでの論点は、大きく2つにまとめることができる。

ひとつは、日本の未来を考える上で、都市空間のデザインをどう捉えるべきか、そしてそれをどのように推進すべきかという点である。これを第一部としてまとめる。

もうひとつは、各地域において、都市空間の質的向上を担うデザイン・チャンピオンの役割とその実践についてである。これを第二部としてまとめる。

本特集が、都市空間デザインに関する議論の輪を広げるきっかけになれば幸いである。執筆者の方々には、ご多忙の中、主旨をご理解いただき、ご寄稿頂いたことに感謝いたします。

第一部：日本の未来と、都市空間のデザイン・チャンピオン

第一部では、都市空間のデザイン・チャンピオンを国家レベルの運動として捉えた上で、その必要性と意義について考える。これはもちろん、誰がチャンピオンになるべきかという急進的な議論ではなく、この問題を取り巻く状況を考察し、未来を展望するものである。

内藤廣氏は、建築家である一方で大学の社会基盤学科（土木系）の教授でもあることから、分野横断的な立場から都市のデザインに係わっている。また、グッドデザイン賞の審査委員長を務めており、さらに広い分野における「デザインの推進役」を担っている。日本の都市の未来に関して、「デザインを都市戦略のコアに位置づけて、日本は変わって行かなければならない。」と発言している（東京大学 COE シンポジウム，2008年2月）。

佐藤可士和氏も、戦略的に都市空間を捉えるべきであるという立場を表明している。その著書（佐藤可士和の超整理術，2007）の中で、「国家のブランディング」という表現を用いて論じている。佐藤氏は、これまで、広告業界において多くの実績を残してきた。例えば、自動車の広告では、商品の性能やスタイルではなく、それを使うユーザーの楽しさ・嬉しさを「子どもと一緒にどこいこう」というコピーとともに綴って、ミニバンの大ヒットに貢献した。近年は、病院や幼稚園などの建築プロジェクトのほか、地域ブランディングも手がけ、都市デザインとの関係が深くなってきている。

浜野安宏氏は、最も早くから都市空間と生活の質との関係についてメッセージを発信してきた人物の一人だろう。商業施設のプロジェクトを多く手がけ、メディアにもしばしば登場したことから、浜野氏に対して派手な印象を持っている読者がいるかもしれない。ただ実際は、一貫して「人が主役」という立場で都市空間を考える主張をしており、その意味で全く「正統派」であると言えるだろう。それぞれの街路にはデザインの作法があり、それを主張し守る存在が必要と述べており（内藤廣対談集，2007）、デザイン・チャンピオンの主旨と通じる考え方であろう。

藤井聡氏は、社会心理学による知見をベースに、交通や景観問題の解決策について研究、著述を行っている。どのように情報を発信すれば、人々の心を動かし、結果として社会的に良い方向を見つけていけるかという手法論であり、デザイン・チャンピオンを考える上で、非常に参考になるものと思われる。

中島直人氏は、都市デザイン論の研究者であり、特に、石川栄耀や高山英華等、日本の都市デザインの先駆者に焦点を当てながら、都市のデザインを良くしようという「運動」がこれまでも存在したことを示す研究で実績を上げている。昭和初期と比べて、情報化や社会構造の変化によって、「都市デザインの専門家」と「市民」との関係が大きく変わっ

た現代においてもなお、先達の歩んだ軌跡から学ぶべきものが多いと思われる。

マリ・クリスティーヌ氏は、平日正午の人気テレビ番組の準レギュラーを務めるなど、「お茶の間」にもおなじみの存在であるが、一方では、故・渡邊貴介東京工業大学教授のもとで修士の学位を取得した都市計画の専門家でもある。都市計画学会創立50周年記念シンポジウムにおいては、これからの都市計画は個人のカリスマ的なリーダーシップではなく、グループやコミュニティーの存在が重要になるという旨の発言をしている（都市計画236号, 2002年）。今回、インタビューという形で、デザイン・チャンピオンの考え方について、意見を伺った。

第二部：地域におけるデザイン・チャンピオンとその実践

第二部では、各地域や地区ごとの都市空間の質を守り、高めていく活動がどうあるべきかについて考える。

山本理顕氏は、前述の国土交通省「良好な景観形成のための建築のあり方検討委員会」（平成19年度）の座長を務め、地域社会に対する建築家の関わり方、貢献の仕方についての議論をリードした。自身も、東京・東雲キャナルコートにおいては、住宅開発のマスターアーキテクトとして、エリア全体のデザイン調整を行った実績がある。

馬場璋造氏は、建築雑誌「新建築」の編集長を長く務めた都市計画・建築評論の専門家である。タウンアーキテクトを連歌師に例えて、地域ごとのデザイン調整役の必要性について発言している（東京大学 COE シンポジウム、2008年2月）。タウンアーキテクト的な取り組みは、これまでも各地で見られるが、それがどのような成果を挙げ、どんな発展を見せようとしているかは、興味深いところである。

鳴海邦碩氏は、前日本都市計画学会会長であり、都市デザインの専門家として研究、執筆活動を行ってきた。また、関西 JUDI（都市環境デザイン会議）の一員として、主に関西地区の地域づくりの実践をリードしてきた。JUDIは、主に都市デザイナー、プランナーの全国組織であり、地方における貴重な専門家ネットワークである。JUDIの他にも、GS（グラウンドスケープ）デザイン会議など専門家による組織が結成されている。GSデザイン会議は、互いに連携、補完しあえる異分野の専門家による横断的なネットワークである。これらの組織は、志高くともなかなか思い通りに仕事を進められない専門家が、少しでも良い都市空間を実現しようと寄り添って活動しているという印象を受ける。今後、このような専門家が、各地域で活躍しやすい状況をつくるためには、全国レベルのデザイン・チャンピオンが、これらの活動をわかりやすく紹介し、一般市民の注目を高めることが求められるだろう。

菅孝能氏は、地区のマスタープランやアーバンデザインを得意とする都市の専門家である。これまでに、神奈川県を中心に、多くの実績を残してきた。本来、大規模再開発においては、敷地内の建築物の規模や配置だけでなく、創出される公共空間の質や、歩行者の動線、建築物の開口の位置等を詳細に示したマスタープランを基に各建築物のデザイン調整を行うことが求められるが、これまでの日本のプロジェクトにおいて、これが成功している事例は、実は少ない。菅氏がコーディネートし、地域住民、自治体、民間企業の協力により進められている「湘南 C-X プロジェクト」は、その推進体制や検討内容において、非常にうまく進展しているようである。

秋元康幸氏は、横浜市都市整備局都市デザイン室・室長として、多くのプロジェクトのデザイン調整を行っている。横浜市は、都市空間のデザインを戦略的に推進している先進自治体である。田村明氏以来、デザイン・チャンピオ的な役割を果たす職員がおり、都市デザイン室が設置された後は、この部署が庁内横断的に活動しているように見受けられる。なぜそのような体制が実現したかは興味深い。

以上のように、各地域においてすでにいくつかの実践を見ることができる。これらの取り組みを、わかりやすく伝え広めることは、第一部で議論した国家レベルでのデザイン・チャンピオンの役割のひとつであろう。やはり、実地のプロジェクトは、最も訴求力のある広報手段なのだ。

事実、前述の C A B E のウェブサイトの中で最もアクセス数が多いのは、事例ケーススタディのコーナーとのことである。今後、日本においても、世界が注目するような都市空間デザインの好事例が多く現れることを期待したい。